

## 2018年度三重大学ベトナムフィールドスタディの意義と課題

奥田 久春・松岡知津子

### Significance and Challenges of Mie University Vietnam Field Study 2018

OKUDA Hisaharu, MATSUOKA Chizuko

〈Abstract〉

This article reports outcomes of Vietnam Field Study 2018 and what students learned, then considers ways to be improved. This 10-day short-term study abroad program was implemented in 2019 March at Ho Chi Minh City University of Pedagogy. Five students participated in this program which consisted of three major cooperative activities with Vietnamese students; Vietnamese studying and participating in Japanese classes, conducting field studies on students' own initiative which aim to equip them with independent personalities and cross cultural communication skills, and visiting museums to study Vietnam War and Vietnamese culture. This article illustrates from students' report that they had an opportunity to think of their ways of life and identity stimulated by Vietnamese students. They also experienced some communication hardships and learned how to overcome them. This article also mentions further outcomes that Japanese students have continued their friendship with Vietnamese students who came to Mie University after the program.

The short-term study abroad program, which students can experience to overcome their hardships of cross-cultural communication and to build their independent personalities, will be required for the international understanding so that students can communicate and have respect for international students. This article suggests that we should appeal this program and develop a system for budgetary support.

キーワード：ベトナム、フィールドスタディ、主体性、異文化コミュニケーション、短期海外研修

#### 1. はじめに（背景、VFSの目的と目標）

本稿は、三重大学で行われている全学的な短期海外研修の一つである、ベトナムフィールドスタディ（以下、VFS）の2018年度の成果と学生の学びを報告し、意義と今後の課題を検討していくものである。

このプログラムは、三重大学と大学間交流協定のあるホーチミン市師範大学において、ベトナム語やベトナム文化の授業をベトナム学生と受講しつつ、学生が主体となって、ベトナムに関連するテーマを設定し、現地調査（フィールド調査）を行うことを特徴として

いる。そしてそれらを通じて、グローバルな視点や国際感覚を持ちながら主体的に行動することや、参加メンバーと協力しながら活動を進めること、また異文化にあって積極的にコミュニケーションを図る姿勢など、グローバル人材に求められる能力・資質を育成することを目的としている。

VFS は、2010 年に開始されたものであるが、年に 1~2 回学生派遣を行っており (長縄・江原 2015)、2018 年度で 12 回目になる。2016 年度より指導および引率に携わる教員が変更になったことから、内容を変更して継続してきた。それまで、ホーチミン市師範大学でのフィールド調査は、数ある VFS のプログラムの中の一つとして短期間で行われ、他に国際協力機構 (JICA) のプロジェクトサイトやストリートチルドレンなどの福祉施設の訪問、ハノイへの移動も含まれていた。しかし、2016 年度からはホーチミン市師範大学での学生交流とフィールド調査をメインのプログラムに据え、各施設訪問などは、フィールド調査に必要であれば訪問するというように、学生が主体的に考えることとした。むしろ重視したのは、ベトナム学生と共に授業を受け、共に考え、共に調査できるものとすることであり、PBL 型の協同学習の研修を目指した。また、ベトナム学生に教わりながらベトナム語を学ぶ点も強調した。これによってベトナム学生が話してくれる日本語や、また国際語だからといって英語だけに頼るのではなく、異文化に対する尊敬の念を持ち、理解に努めるようにした。

2016 年度からの VFS (事前研修を除く) は、具体的には大きく 3 つのプログラム内容から構成されている。1 点目はホーチミン市師範大学におけるベトナム語学習、2 点目はフィールド調査、3 点目は戦争証跡博物館、クチ・トンネル、歴史博物館の見学と水上人形劇の鑑賞といった文化体験である。これら全ての活動に共通する要素として、ホーチミン市師範大学のベトナム学生と共に行動することが挙げられる。これらは、あらかじめ決められたプログラムに参加するだけの「受け身」の姿勢になることや日本人同士で固まって行動することを防ぎ、ベトナムという異文化にて学生の興味関心に沿って、コミュニケーションを意識しながら主体的な学びを進めることを狙いとしているためである。

このような学生交流を重視した短期海外研修は、他大学でも事例が見られる。確かに短期海外研修の効果や意義については、語学などのコミュニケーション能力の向上、異文化理解の体験などが挙げられるが、それらを超えるものとして、単にあらかじめ組まれたスケジュールに沿って、受動的にプログラムをこなすのではなく、何らかのコミュニケーション・タスクを与えて学生が積極的に異文化にかかわるようにしている研修 (藪田 2013) や、現地の学生との PBL 型の研修も見られる (又吉 2016)。また、藤原・栗山 (2013) が、短期海外研修は単なる観光のような「見る旅」ではなく「学びの旅」へと変貌を遂げ

たと述べているように、海外研修のあらゆる場面で学びの機会となることが求められつつある。また、短期海外研修ではないが、国内での留学生との協働作業による学びを国際共修として注目するものもある（末松 2019）。

VFS でも研修全体において学生交流を重視し、目的を持って積極的に関わる学びを重視しているが、特に主体性、実践的なコミュニケーション、異文化理解の涵養を重視しているのが特徴である。

では、こうした理念で行われている VFS において、2018 年度に参加した学生は、実際にどのような学びを得たのだろうか。本稿では『2018 年度ベトナムフィールドスタディ報告書』に参加学生が寄せた感想から、学生の学びを読み解いていきたい。その際、特に本研修の狙いでもある「主体性」、「異文化コミュニケーション」の 2 点に着目していきたい。

## 2. VFS 実施の経緯

2018 年度の実施に向けて学生募集を開始したのは 11 月に入ってからであった。これは、例年 9 月末に公募をかけ、10 月には募集説明会を実施したのと比べて遅いスタートである。この要因として、前年度まで配分されていた予算の終了に伴って、VFS 継続に関する検討に時間を要したからであった。このため 11 月 29 日に募集説明会を行ったが、出席者は少なかった。その後、学生への全学情報伝達のポータルサイトによる学生への案内、

表 1. 2018 年度 VFS 行程表

	日 程	午 前	午 後
1	3 月 10 日	出発（中部国際空港にて集合）	ホーチミン市到着 サイゴン大聖堂、中央郵便局
2	3 月 11 日	開講式、学生交流、 フィールド調査のグループ活動	ベトナム語の授業 ベトナム市場、ドンコイ通り
3	3 月 12 日	フィールド調査のグループ活動	統一会堂、戦争証跡博物館
4	3 月 13 日	2 年生の日本語授業に参加 フィールド調査準備	歴史博物館、水上人形劇
5	3 月 14 日	初級日本語クラスのアシスト	フィールド調査
6	3 月 15 日	フィールド調査	日本語クラスにて日越文化紹介
7	3 月 16 日	クチ・トンネル	自由行動
8	3 月 17 日	自由行動	自由行動
9	3 月 18 日	発表準備	最終発表会・修了式、出発
10	3 月 19 日	帰国（中部国際空港にて解散）	

筆者の授業受講者への案内を通じて周知を図り、参加希望者 5 名を得た。

今回の参加者は医学部看護学科 2 名、生物資源学部生物圏生命化学科 2 名、同資源循環学科 1 名の 5 名で、2 年生が 1 名、残り 4 名は 1 年生であった。また、女性が 3 名、男性が 2 名であった。日程は 2019 年 3 月 10 日から 19 日までの 10 日間で、詳細は表 1 のとおりである。

### 3. VFS 内容 (日本で行ったもの)

#### 3.1. 事前指導

VFS の事前指導は、すべての学生の時間が確保できる放課後に行った事前研修と、昼休みに行ったベトナム学生によるベトナム語研修があり、それらは独立して行われた。

##### 3.1.1. 事前研修

VFS では、これまで出発までに 4 回～5 回の事前勉強会を行ってきた。これは、渡航準備や基本的な持ち物、集合時間、海外安全研修といった基本事項を伝達するオリエンテーションやフィールド調査の準備のためだけでなく、出発に向けた学生の意識向上を目指しているものである。学生の主体的参加を促すために、出発日や日数といったことまで学生と相談しながら決めるようにしている。2018 年度は 4 回実施し、いずれも 18 時から 1 時間～1 時間半程度行った。各回、必ずフィールド調査のテーマや調査方法について検討するようにしたが、それ以外は主に次の内容を行った。

表 2. 事前勉強会の主な内容 (フィールド調査についての検討除く)

第 1 回	1 月 15 日	自己紹介、研修日程相談、研修概要・渡航前手続き説明、事前学習担当割り当て
第 2 回	1 月 22 日	事前学習「ベトナム料理」発表。行程・航空券手続き等確認、ベトナム史概説
第 3 回	2 月 12 日	事前学習「観光地」「おみやげ」発表。携行品や緊急連絡先、持ち物等相談
第 4 回	3 月 5 日	事前学習「観光地」発表。海外安全講習、集合時間と場所など最終確認

##### 3.1.2. ベトナム語講座

また、VFS では出発までにベトナム留学生によるベトナム語講座を行っている。これはベトナムへの興味関心を高め、ベトナム語での簡単な挨拶などができるようにするためだけでなく、1 章に述べたように、日本人学生もベトナム語を学ぶことによって、相手の文化や社会を尊重する気持ちを養うためでもある。例年は前節で述べた事前勉強会において 2 回行う程度だったが、2018 年度は三重大学国際交流チームの協力のもと、また同職員の研修も兼ねて、1 月後半の昼休みに計 6 回行われた。講座では 2 名のベトナム留学生に交代で講師を務めてもらい、市販のテキストを用意し、発音、人称、挨拶、数字やお金

(ベトナム通貨のドンは何桁が大きい) の数え方、道の聞き方、タクシーの乗り方などを学んだ。

#### 4. ベトナムにおける実際の活動

##### 4.1 ホーチミン市師範大学の学生との交流

VFS では学生との交流を重視しているが、これが可能なのはホーチミン市師範大学日本語学科にて、本研修に全面的に協力してくれるベトナム人学生がいるからである。ベトナム人学生が参加するのは、ホーチミン市師範大学の授業の一環と位置づけられており、単位取得に繋がるだけでなく、「実践的な日本語を学ぶ機会でもある」ためであり、多くのベトナム学生が積極的に参加してくれている(参加学生の意見より)。

実際の活動としては、主に1章に述べた3つのプログラムを実施した。しかし、これまでと異なったのは、ホーチミン市師範大学でのベトナム語学習が、教員による講義ではなく、ベトナム学生による授業となったことである。これは学生らしい工夫を凝らしたもので、具体的には、まず、ベトナム学生とペアになり簡単な自己紹介をすることで、特に難しいベトナム語の発音を学ぶことができた。次に、ペアでの練習成果を発揮するために、全体で輪になり、風船が回ってきたら自己紹介するといったゲームも行われた。更に街中でベトナム語を使用できるよう、実物を教材として用いた買い物ゲームが行われ、実践的なベトナム語学習が実施された。ここには20名ほどのベトナム学生が参加しており、多くの学生との交流に繋がった。その一方で、これまで実施して頂いていたベトナム文化に関する講義については、担当して頂いていた東洋史が専門のLieu教授が退任されたことにより開講されなかった。学術的な内容として過去の参加学生には好評ではあったが、その分、今回はより学生交流に重点を置くことにつながった。

2点目のフィールド調査については、今回は「保健医療の日越比較」、「食文化の日越比較」、「ベトナムの果樹栽培と水の利用」という3つのテーマに分かれて、それぞれ1名から2名の三重大学生と、4名程度のホーチミン市師範大学生がグループを作った。まずは三重大学生が希望する調査テーマの趣旨を説明することから始まり、お互いに意見を出しながら、具体的問いの設定、調査内容と方法の検討、調査計画の立案、調査地への連絡、調査実施、調査結果のとりまとめと分析、発表内容の検討とスライドの作成、発表という手順で行われた。

保健医療をテーマとするグループは、病院を訪問し、施設を見学するとともに、看護師へのアンケート調査を実施した。食文化グループは、ホーチミン市師範大学の学生を対象にアンケートや聞き取り調査を実施し、また近隣のベトナム料理店を訪問して料理や食文

化マナーの観察を行った。ベトナム果樹栽培グループは、スーパーにてベトナム特産の果樹について調査した上で、今回の研修をコーディネートしてくれたホーチミン市師範大学生の実家である農家を訪問し、栽培方法と水利用について視察、聞き取り調査を実施した。いずれも日本とベトナムを比較する内容でまとめられ、最終日に協同で発表が行われた。

3 点目は例年どおりではあるが、戦争証跡博物館、クチ・トンネル、歴史博物館の見学と水上人形劇の鑑賞である。いずれも見学にとどまることなく、ベトナム文化を尊重し、理解するとともに、ベトナム戦争について学ぶ機会になっていた。また、参加したホーチミン市師範大学生にとっても初めて訪問するものであったことから、両者にとって学び合いの場となったようである。

以下は、水上人形劇と戦争証跡博物館訪問時に関する三重大学生の感想である。

「伝統的と聞くと堅苦しい感じがしますが、水上人形劇は、そのような重々しい雰囲気を感じられず、いろいろ工夫が凝らされていて、発見や独特の雰囲気、そして笑いのある劇を味わう事が出来ます」(I.T 水上人形劇鑑賞の報告)

「大変な障害を持ちながらも懸命に生きようとしている人々の姿に胸が熱くなりました。この戦争証跡博物館の訪問によって、改めて戦争の恐ろしさを再認識し、我々のような若い世代が二度とあのような悲劇を起こさないようにしていくという意識が大切であると強く思いました」(K.S 戦争証跡博物館訪問の感想)

これら 3 点のプログラム内容には 2018 年度にいくつかの変更点があったことを述べたが、更に追記すべき変更点は、ホームステイが廃止されたことである。これは、これまで同大学の学生家族の自宅に 1 泊 2 日間受け入れて頂いたものだが、今回の研修をサポートしてくれた学生の中で自宅通学している人数が少なく、調整が困難だったことによる。その結果、家庭生活を体験することができなかったが、その時間を自由時間として、学生たちの主体的な行動を促すことにつながったことを補足しておきたい。

## 4. 2. ホーチミン市師範大学における日本語授業への参加

### 4. 2. 1. 日本語授業参加への意義

今回、三重大学において日本語教育を担当する教員が指導・引率に加わったことから、初の試みとして、ホーチミン市師範大学日本語学部における日本語授業に参加することとなった。具体的には、(1)三重大学教員が主体となって授業を行うもの、(2)ホーチミン市師範大学の教員主導の授業ではあるが、三重大学生が事前に準備し、発表するもの、(3)

ホーチミン市師範大学の教員が行う日本語授業の見学があった。このような日本語授業への参加は、以下のいくつかの点において意義があると考えられる。まず、三重大学教員主導の日本語授業に関しては、将来、交換留学生として三重大学への留学を希望する学生にとって、三重大学教員の授業に参加することで留学後の留学生活がある程度具体的にイメージできるということが挙げられる。これは、ホーチミン市師範大学生の三重大学への留学動機を高めることにもつながりうると考えられる。なぜなら、留学先の教員による授業をあらかじめ体験することは、学生たちの留学に対する不安を減らすことにつながりうるからである（松岡・服部 2017）。次章でも詳しく触れるが、日本語授業に参加する三重大学学生にとっても、同年代の大学生たちの教育環境および学習姿勢に触れることは、自らを省みる機会となると考えられる。すなわち、ベトナムの大学生が限られた日本語知識および運用能力で、一生懸命に日本語でコミュニケーションを取る姿に、同じ大学生として学ぶべきものがあると考えられるからである。

学生のみならず、教員側にも大きな意義がある。まず、両大学の教員にとって、それぞれの大学がどのような環境で、どのような教育を行っているかを垣間見る機会となる。すなわち、三重大学教員にとっては、現在三重大学に在籍する交換留学生たちが、どのような環境でどのような教材を用い、いかにして日本語を学んできたのかを知ることができる貴重な機会であるし、ホーチミン市師範大学の教員にとっても、ホーチミン市師範大学の学生が三重でどのような授業を受けているかを知ることにもつながる。

次節では、三重大学教員が担当した2年生の日本語授業と、三重大学学生が発表を行った3年生の授業についてさらに詳細に述べていく。

#### 4.2.2. 日本語授業について

今回、日本語授業を行うにあたり、事前にホーチミン市師範大学のコーディネーターを通じて三重大学教員および学生が主体となって行う授業の学年や大まかな人数、授業名、教室の設備といった情報が伝えられた。まず、2年生のクラスは、学生たちがおよそN5終了レベルであるとの情報から、簡単な語彙や文型を用いた三重大学及び三重県に関するクイズを行った。クイズの形式は○×や選択問題であり、写真や画像を多く用いることで、日本語が聞き取れなくても理解できるよう配慮した。それでも理解できない語彙や表現については、上級生のサポート学生やベトナム人教員の助けを借りた。次に、グループに一人、三重大学学生または引率教員が必ず入るようにしてグループを作成し、グループごとに日本語またはベトナム語で自己紹介を行った後、互いに質問し合った。学生同士が初対面であること、会話能力のレベルが不明であったことから、「好きな色は何ですか」「趣味は

何ですか」「歌を歌ってください」といった簡単な質問・指示が書かれたカードをグループごとに事前に準備し、それらを用いてコミュニケーションを取るようにした。ホーチミン市師範大学の 2 年生の学生たちは、限られた語彙・文法を用いて、積極的に三重大学生に質問したり、三重大学生の話を理解したりしようとしていた。

3 年生のクラスにおいては、三重大学生が渡航前に準備した「日本の年間行事」「日本の食べ物」といったテーマについての発表をパワーポイントで行ったり、「日本の遊び」について、実際にデモンストレーションを行ったりするなどして紹介した。その後、グループに分かれて、それぞれのテーマについてのディスカッションを行った。

三重大学生たちは、これまでに日本語学習者と接した経験が少なかったことから、はじめはどうすれば自分の話したいことが伝わりやすくなるのか、より分かりやすくするためにはどんな工夫が必要なのかと試行錯誤していた。しかし、時間の経過とともに「シンプルな言葉で話す」「言葉を短く切って話す」「絵や写真、身振り手振りを使って示す」「言葉を言い換える」といった方法を体得していき、徐々にスムーズにコミュニケーションが取れるようになっていった。

## 5. 報告書にみる学生の学び

VFS では参加学生に報告書の提出を義務付けている。2018 年度も各訪問先の内容と感想について担当者を決めて記述することと全体の感想をまとめてもらった。いずれも帰国後、半月以内に提出されたものである。この学生の報告書から、学生の学びを読み解いていきたい。

### 5.1. 主体性

主体性とは、積極的な取り組みができるという意味だけでなく、他者との出会いを通じて自己の確立を図ろうとする姿勢と捉えたい (奥田 2017)。VFS では、異文化の他者であるベトナム学生との交流に重点を置いているが、単に交流を通じて仲良くなるというだけでなく、自己の確立のために、自身の生き方に何からの影響を受けることを期待している。次の感想からは、そうした学生の学びや影響を読み取ることができる。

「このように、多くの面白い発見があったベトナムフィールドスタディですが、一番の成果は、一緒に参加して、色々なことに対して切磋琢磨しながら取り組んだ仲間と、ベトナムに来た自分たちをもてなしてくれて仲良くなったベトナムの学生たちと、友達になれたことです。みんなを見ていて、今後何を努力・習得していくかなどを深く考える事が出来ました。本当にいい経験・思い出・目標をこのフィールドスタディを通して得られました」



中略「そんな元気な学生たちと交流することで、少しずつこの積極的な雰囲気をも自分の中に取り込んでいきたい、普段の授業に対しても前向きな気持ちで楽しんで取り組みたいと思えるようになりました」(I.T 全体の感想)

「ホーチミン市師範大学の学生が一生懸命勉学に励む様子に刺激された。私も負けていけない。今できることを精一杯頑張ろうと強く思った」(S.M 全体の感想)

「今回の研修でベトナムの方々に温かく接していただけたことは、私の中でとてもありがたい、日本に帰ってからの外国の方との接し方に変化を与えてくれる体験でした。大学内や街で出会う外国の方と、こちらから勝手に壁を作るようなことはしないで、積極的に声をかけたり、困っている様子であれば手をさしのべたりしたいと思います」(A.M 全体の感想)

これらからベトナム学生から刺激を受け、自分の生き方を考える機会になった様子がかがえる。VFS 終了後、現地でサポートしてくれた学生のうち 5 名が 2019 年 4 月から三重大学へ交換留学生として留学してきた。VFS に参加した 5 名の学生が歓迎会や誕生会を主催するなど、現在も交流が続いている。さらに、留学生全般の支援を希望し、チューターを申し出る学生も複数出てきている。

## 5.2. 異文化コミュニケーション能力の向上

これまで、どの参加学生もベトナム語を学んだ経験がなく、今回初めて同年代のベトナム人学生から学んだ。講師を担当してくれたベトナム人学生らも、日本語が専門であり、ベトナム語を教えるプロではなかったが、事前研修におけるベトナム語講座も、現地で受けたベトナム語講座も、様々な工夫が凝らされており、コミュニケーションを重視した内容となっていた。そのため、学生の中には、到着後すぐにベトナム語で自己紹介をする学生もいた。以下、ベトナム語学習に関する学びについて触れたものをいくつか紹介したい。

「自分一人で勉強するのと、教えてもらいながら楽しく勉強するのは、覚える量も違うし、忘れにくいのではないかと感じました」(K.N ベトナム語学習についての感想)

「自分の国の言語ではない言語をしゃべるとき豊富なボキャブラリーはもちろん大切ですが、失敗を恐れず伝えようとする気持ちがコミュニケーションの第一歩であると感じまし

た」(S.M ベトナム語学習についての感想)

次に 4 章で触れた日本語授業に参加する中でも学びを得ていることを紹介したい。

「ベトナムの学生が何を伝えたいのかわからないときや、逆に自分の伝えたいことが伝わらないときがあり、困ったときもありました。しかし、お互いにジェスチャーや絵を駆使してコミュニケーションを図りやっとの思いで伝わったときは達成感を感じるとともに心が通った感覚がしてとても嬉しい気持ちになりました」(S.M 日本語授業に参加した感想)

これらのように、外国語を学ぶ環境や姿勢についての気づきを述べたものや、以下のよう  
にコミュニケーションの本質についての気づきを得たものもあった。

「これから近い未来、AIが発達してどんな言語であっても瞬時に翻訳できるかもしれない。しかし、人と人とのコミュニケーションの中で、身振り手振りで伝わったときの喜びは何にも代えがたいものだった。私はその人と人とのつながりを大事にしていきたいと強く感じた。このベトナムフィールドスタディで得られたものはとても大きく、私の人生の指針となるに違いない。この十日間の経験が、将来のために有意義な大学生活を送ろうと努力するエネルギーになると思う。(S.M 全体の感想)

「日本では当たり前のことが当たり前ではなかったりすることを知れて、面白かったです。うまく意思疎通ができないときもありました。しかし、言葉を言い換えてみたり、例を出してみたり、伝えようとしてくれること、伝えたいことをお互いが理解していく、わかりあえた時はうれしいと思うと同時に目には見えない絆のようなものを感じました」(K.N 全体の感想)

現代は、機械翻訳がますます発達し、それによって容易に論理的意味が伝えられる時代となってきている。しかしながら、参加学生たちは、機械翻訳の助けを借りつつも、相手と心と心を通わせることがいかに重要かを述べている。また、同じ大学生として、異国の学生たちが熱心に取り組む姿を間近で見ることができたことは重要な意味を持つことが分かる。

また、以下の感想からも、単なる情報の伝達ではなく、相手を尊重する姿勢やコミュニケーションの内容から認知的な学びを伴っていることが見受けられる。

「今回は初めて、相手の方に思いを伝えたい、相手の方がこんなによくしてくださったから、恩返しをしたい、という気持ちで、言語を習得したいという思いが芽生えました」(A.M 全体の感想)

「教えるだけ、教えてもらうだけで終わるのではなく、日本のことを伝え、ベトナムのことを学べるという、これこそが交流だと感じました」(K.N 全体の感想)。

更に、次の感想からは、言語以外のコミュニケーション行為がとれていたり、学んだばかりのベトナム語を実際に使用したりするなど、行動に結びついていることが窺える。

「1年生との交流の時には日本語が伝わらないことも多かったのですが、写真を見せたり、ジェスチャーをしたりすれば解決することが多かったです。また、ホーチミン市師範大学の学生は英語を使える人が多かったので、日本語で伝わらなくても、簡単な英語を使って言い換えれば伝わることもありました。学生たちとの交流の時間以外の生活の時のコミュニケーションは、お店なら習った簡単なベトナム語は通じましたし、もし通じなくてもメニューを見せながら注文すれば大丈夫です」(K.S 全体の感想)

最後に VFS 全体に関するコメントから、学生の学びを考察していきたい。今回、参加者5名のうち4名が1年生であったが、海外経験が豊富でない学生が多く、出発前には不安を抱えている学生もいた。しかし、研修後には次の感想のように、自信をもって VFS に参加したことがよかったとしていることが読み取れる。

「ベトナムフィールドスタディに参加してみて思ったことは、本当に参加して良かったということです。ベトナムという国が心から好きになりました。日本とは環境や文化が違うところが多いので、車で移動している間に目に映るものすべてが新鮮で楽しかったです。(中略) 私にとってベトナムは未知の国で、ベトナムフィールドスタディに参加するのは勇気があることでしたが、今では参加を決めて本当に良かったと思っています」(K.S 全体の感想)

「ベトナムでの10日間は、楽しかったこと、困ったこと、もどかしかったことなど全て含めて、人生で大切な経験になりました。この経験を、将来の仕事やこれからの人生に必ず活かして生きていきます」(A.M 全体の感想)

「日本に帰ってきてから、ベトナムが恋しく感じています。もう一度ベトナムに行きたいです」(K.N 全体の感想)

これらから、全体的にはコミュニケーションの難しさ、その克服の大切さと意義を体感しながら学んでいることが分かる。また他者との交流および仲間を見ることによって自己の発見に繋がっていることも分かった。

また、内容的には同様であっても、誰一人同じ文面で表現している者はいない。つまり、単に「楽しかった」、「勉強になった」などの具体性のない、ありきたりの感想ではなく、それぞれがそれぞれの言葉で表現していることから、各自がそれぞれの学びを得たということができよう。

## 6. まとめと今後の展望

以上、ベトナムフィールドスタディの事前研修から現地における活動、学生の振り返りを見てきた。

そして、事前学習および現地でのホーチミン市師範大学生との共修から生まれる学びの成果を考察してきた。学生の感想のみならず、帰国後の学生たちの実際の活動からも、本研修の効果が確認できる。すなわち、5.1. でも触れたように、研修が終わったらそこで交流が終わってしまうのではなく、その成果が帰国後の主体的な交流にもつながっている点、また、チューターとしてほかの留学生の支援も始めている学生が多い点などから、本研修が有意義であるといえよう。

また、今後ますます国際化が進む現代において、日本にいながらにして外国人と接する機会は増えていくはずである。三重大学においてもおよそ300名の留学生が在籍しており、三重大学生たちが留学生と接する機会も出てくるであろう。その際に、相手をどのように理解してコミュニケーションを図るのが課題となってくるであろう。そうした場面では、「異文化への尊敬」「恩返し」といった気持ちが自然と出てくるような、異文化でのコミュニケーションの難しい壁を克服した体験が役立つはずである。そしてこうした体験の機会を学生自ら設計できるような短期海外研修が、今後ますます求められてくるのではないだろうか。

今後の課題として、まず、フィールドスタディの実施形態とその時期及び費用について検討することが挙げられる。近年、三重大学で実施する他の海外研修と重なっていることや、今回ベトナムフィールドスタディの実施の決定が遅れたことなどから、参加者募集に苦慮した。最終的には5名の意欲ある参加者が集まったが、このような現象は近隣大学で

も起こっているという。しかしながら、これからの社会において、学生の国際力、コミュニケーション力の養成には、このようなフィールドスタディは重要であると考えられることから、今後は三重県下の高等教育機関と連携するなどし、海外フィールドスタディを続けていく道を模索する必要がある。また、本研修には奨学金等が付与されていないことから、安価で気軽に海外に行ける昨今、わざわざ大学の研修旅行で行かなくてもよいと考える学生もいるのではないかと思われる。実際には、通常の観光旅行では体験できない同世代の大学生との交流、大学における体験等があるのだが、それらの魅力を十分に伝えていく必要があるだろう。

次に、これまでの事前研修ではベトナム人学生には語学学習においてのみ関わってもらっていたが、今回の事前研修では、ベトナム語学習以外にもフィールド調査の準備などでも一部かかわってもらうこととした。それにより、フィールド調査の準備において、日本語だけでは難しい情報収集などもより有効に行うことができた。また、サポートに入ったベトナム人学生たちも、これまでの日本留学において、いつも助けられたり教えられたりする立場であったのが、サポートできる立場に立てたことに喜びを感じていた。今後、事前研修段階におけるベトナム学生との交流の機会を増やし、現地においてのみ交流するのではなく、出発前から留学生と交流することで、よりよい研修が作り上げられるものと確信している。これらの活動を通して、単なる交流協定校の留学生の受け入れ及び送り出しといった関係からさらに発展し、より強い関係を構築していきたいと考えている。

## 謝 辞

本研修を実施するために、全面的にご協力くださったホーチミン市師範大学の Chi 先生および Nga 先生をはじめとするホーチミン市師範大学の先生方、そして全ての日程で暖かく接してくださったホーチミン市師範大学生の皆さんに心よりお礼申し上げます。また、VFS 実施に際し、チケットや保険、海外安全講習等の面でサポートしてくださった国際交流チームの皆様にもお礼申し上げます。

## 参考文献

- 奥田久春 (2017) 「アクティブラーニングが大学生の留学動機に与える影響に関する予備的考察」『三重大学高等教育研究第』 vol.23、pp 125-128.
- 長縄真吾・江原宏 (2015) 「ベトナムでの海外体験学習を通じた参加学生の意識変化—グローバル人材育成の観点からの一考察」『三重大学国際交流センター紀要 2015』 vol.10、pp.137-152.
- 藤原孝章・栗山丈弘 (2014) 「スタディツアーにおけるプログラムづくり—『歩く旅』から『学ぶ旅』への転換」『国際理解教育』 vol. 20、pp.42-50.

又吉斎 (2016) 「交流活動の活発化を図るプロジェクト型学習 (PBL) - 沖縄女子短期大学海外研修プログラムの事例紹介 -」ウェブマガジン『国際交流』5月号 vol.62、pp.26-35.

松岡知津子・服部明子 (2017) 「ドイツ人留学生の三重大学へ留学動機」『三重大学高等教育研究』第 23 号、pp.89-98.

藪田由己子 (2013) 「短期海外研修におけるコミュニケーション・タスクを用いた異文化交流プログラムの試み」『清泉女学院短期大学研究紀要』vol.31、pp.62-78.